

地域は舞台

イサム・ノグチ庭園美術館
(香川県高松市)

世界的芸術家が残していった

この地でしか成立し得ない

ユニークな美術館。

芸術家の美意識と 地域文化との融合

イサム・ノグチ庭園美術館

20世紀を代表する芸術家イサム・ノグチは、庵治石の産地であり、山と海に囲まれ、静かな田園風景が広がる高松市郊外の牟礼に、特別なインスピレーションを感じ、1969年、65歳のノグチは牟礼にアトリエを構えた。以来、亡くなるまでの20年間、牟礼とニューヨークを行き来して創作活動を続けた。ノグチの死後、この場所を人々のために生かして欲しいという遺志

を受けついだ人々が「イサム・ノグチ日本財団」を設立し、アトリエと周囲の自然と一体となった作品群を「イサム・ノグチ庭園美術館」として公開している。「イサム・ノグチ日本財団」が2012年、サントリー地域文化賞を受賞。開館は火・木・土曜日の午前10時、午後1時、午後3時の1日3回で予約制。入館料は一般・大学生が2,160円、高校生1,080円、中学生以下無料。

〒761-0121 香川県高松市牟礼町牟礼3519
Tel. 087-870-1500 / Fax. 087-845-0505 <http://www.isamunoguchi.or.jp/>



美しい曲線を描くランドスケープ。空間全体がひとつの環境彫刻になっている。



香川県高松市、日本三大石材産地のひとつとして有名な牟礼は、高級石材の庵治石の産地として古くから栄えた。眼前に屋



木漏れ日の中、庭先に置かれた作品が表情を刻々と変化させる。

い。敷地内は美しく掃き清められ、美術館というよりは、まるで神社か聖地のような印象を受ける。完全予約制のため、鑑賞するにはあらかじめ申し込みが必要な上に、都会からのアクセスも決して良いとはいえない立地だが、開館以来、一四年間で九三方国、延べ一五万人以上の人がここを訪れたという。この地方美術館が、人々を魅きつけるその魅力とは何か。

がそびえる風光明媚な瀬戸内海の町である。一九六〇年代半ば、日本での制作拠点を探していたイサム・ノグチが、石彫の制作をフォローするパートナーとして県を通じ紹介されたのが、現在イサム・ノグチ日本財団の理事長を務める和泉正敏氏だ。和泉氏は当時、若き造形作家として「石のアトリエ」を主宰し、石の世界

ガラリと音を立て、武家屋敷の大きな引き戸を開ける。

「どうぞ」と促され中へ足を踏み入れた瞬間、凛とした気配を肌で感じた。涼やかで心地よい緊張感が空間に漂っている。思わず小さな声で「お邪魔します」と口にした。

仄暗い部屋の中でふと甘い花の香りに気づく。日本家屋の程よい暗さと静けさに、五官の働きがいつもより活発になっていくようだ。

イサム家と呼ばれるこの美しい屋敷はかつて、彫刻、プロダクトデザイン、ランドスケープ・デザインと幅広い分野で活躍した世界的芸術家イサム・ノグチが暮らしていた。現在は保存管理されており、通常内部へ立ち入ることは出来ないが、日々注意深く手入れされているせいも、今もプライベート空間のような繊細な空気が流れている。世界には実に様々なスタイルの美術

館があるが、ここ四国・牟礼のイサム・ノグチ庭園美術館はとりわけユニークだ。

この美術館は、イサム・ノグチが日本での彫刻制作の拠点としていたアトリエを、慈善や教育に役立てて欲しいという彼の遺志に基づき、その死後も変わらぬ姿で残し公開しているのだが、作業場、庭園に至るまで、彼の彫刻を取り巻くこの空間全体をひとつの作品、環境彫刻としてとらえるという独特なコンセプトを持っている。

配置された一五〇点の彫刻作品には、タイトルやデータを記したプレートなどついていない。解説や年譜といったものも見当たらない。



静かな暮らしぶりを感じさせるイサム家の内部。自身でデザインした照明器具「あかり」が映える。

に新たな可能性を模索していた。数多くの人材を抱える石の町で彼に白羽の矢が立ったのは、石工職人としての高い技術を持ちながらも伝統に縛られる事なくノグチの自由な創作に協力できるということが理由だった。

石彫制作のフォローとは、ノグチが思い描いたフォルムを、石屋の加工技術で具現化することだが、それ以外にも地元の職人達と協力して住居や仕事環境を整えたり、時には命がけの冒険をとまなう石釣り（石材探し）に同行するなど、和泉氏のサポートは、ノグチの晩年まで二〇年以上に渡って続いた。

庭園美術館を訪ねた日、私は和泉氏に直接話しを伺う機会を得た。

数々のノグチ作品をその手で共に作り上げ、また自らも作家として多くの彫刻作品を世に送り出してきた和泉正

敏氏。

口調は静かでゆったりしているが、澄んだ瞳に時おり強い光が宿り、シャープで骨太な芸術家という印象を受ける。

和泉氏の語るノグチの生活はストイックなものだった。イサム家を見学したとき、室内にまつたとくと言つて良い程生活感が

感じられなかったが、これは公開用にディスプレイされていた訳ではなく、実際に常にきれいに片付いた状態で暮らしていたのだという。自らを律した生活を送りながら、職人達も驚くような熱心さで日々仕事に没頭したノグチの姿を「禅僧のようであり、探検家のようであり、発明家のようでもありません」と和泉氏は評す。

牟礼でのノグチは制作に集中し、関係者以外との交流を持つ事もなかった。私たちが想像しがちな「世界的

のです。ニューヨークでは出来ない事だと先生も感激しておられました」

と和泉氏はしみじみ語る。

イサム・ノグチ庭園美術館は、ノグチが牟礼に通った二五年という長い歳月をかけ、少しずつ形成されて今の姿になった。そこには写真の女性達はもちろん、石工、大工、左官といった地元の職人達の働きが常にあった。環境

芸術家と地域住民との心温まるふれ合い」のようなものは特にはなかったらしい。

しかし一方で、創作活動は地域社会に支えられて成り立っていた。絵画や比較的小規模なサイズの彫刻と異なり、ノグチが手がけていたような大掛かりな石の彫刻は、個人だけの力では制作できない。石材の調達運搬にはじまり、道具のメンテ、石の加工に携わる人手といった石の町ならではの環境が必要だった。



アトリエに残された石膏模型が制作の痕跡をリアルに伝える。



大作「エナジー・ヴォイド」の圧倒的な存在感。台座には打ち水が施されていた。



イサム・ノグチ日本財団の理事長を務める和泉正敏氏。



古い酒蔵を移築して設けた展示蔵。時間、空間、質感の対比が味わい深い。

刻という言葉をも、イサム・ノグチを核に地上に広がった小宇宙だと私は解釈した。

インタビュの後、和泉氏の運転する車で、周辺を案内して頂いた。広大な石材加工場では、巨大な機械やクレインを使い、大掛かりな作業をする傍ら、ノミとハンマーを使い昔ながらの方法で石を割る仕立て職人の姿もあった。ノグチの制作を共にサポートした職人達は今も和泉氏のもとで働いており、氏の芸術活動に貢献している。

加工場の次に車に向ったのは集落の奥へ続く山道だった。山中で車を降り、特に説明もないまま歩き出す和泉氏について行くと、突然、大きな石彫が林立する広場が現れた。石彫は全て和泉氏の作品だった。

一九六四年に芸術活動の場として「石のアトリエ」を設立した当初、や

はり周囲の抵抗はあったという。当時何よりも大切だった田んぼを潰して作業場にし、墓石や灯籠といった伝統的なモチーフではなく、まだ売れるかどうかもわからぬ抽象作品に挑戦しようとしたのだから無理もない。

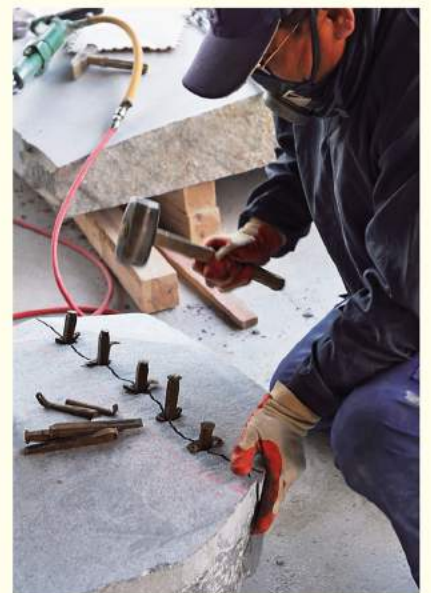
「一緒に石の勉強をしましょう」こう語りかけたというノグチは、和泉さんをしぼしぼ海外旅行へと誘い、行く先々でウイリアム・デ・クーニングやジョージア・オキーフといった世界的に有名な芸術家達に引き合わせた。

「ノグチ先生と会わなかったら、香川県から出る事もなかったと思います」と笑う和泉さんの作品は今、新国立劇場や台湾の故宮博物院をはじめ、国内外で高い評価を受けている。

牟礼の石工文化がイサム・ノグチの芸術を支えたと同時に、イサム・ノグチの存在もまた、従来の伝統にとらわれぬ新しい芸術の息吹を牟礼にもたら



危険を伴うため緊張感溢れる石材加工の作業現場。



複数のノミを一列に打ち込み石を割る昔ながらの工法。

した。

その舞台となったイサム・ノグチ庭園美術館は、訪れる者に美に触れる喜びと、インターネットを検索しても決して得る事の出来ない、五官を通じて創造的インスピレーションを与えられる。

撮影・文 桑田瑞穂



高松空港に設置されたノグチの遺作「TIME AND SPACE」